

序

芝原 宏治

大阪市立大学大学院文学研究科言語情報学教室

田畑 雅英

大阪市立大学大学院文学研究科ドイツ言語文化教室

本論文集は、大阪市立大学文学研究科COE事業の一環として2003年の秋に同大学学術情報総合センターで行われた国際シンポジウム「都市とフィクション」の成果である。

「フィクション」(‘fiction’) という語から想起されるものはいろいろある。年輩の人なら「サイエンス・フィクション」(‘science fiction’) と呼ばれるものをまず考えるかもしれない。Raymond Williams の愛読者なら、「都市のフィクション」(‘the fiction of the city’) および「田舎のフィクション」(‘the fiction of the country’) という句を思い出すかもしれない。いかめしい学者なら、むかし読んだ時代小説などを記憶から呼び戻して、怪しげな記述で人々の事実認識を誤らせるものこそフィクションだと考えるかもしれない。そうは考えないまでも、日本では、「フィクション」と聞くと多少のいかがわしさをもつものを想像する人が少なくないのではないと思われる。しかし、本シンポジウムの立案者が最初に考えたのは、これらのいずれでもなく、‘counterfactual’ (反実の、反実仮定の) という英単語である。一般になじみのある単語の中で‘counterfactual’ の名詞形に最も近い意味を表すものとして、私たちは「フィクション」(‘fiction’) を選んだのである。

哲学者の Nelson Goodman は、1947年に発表した論文 ‘The Problem of

Counterfactual Conditionals' (「反実条件文の問題」)の中で、次のように書いている。

The analysis of counterfactual conditionals is no fussy little grammatical exercise. Indeed, if we lack the means for interpreting counterfactual conditionals, we can hardly claim to have any adequate philosophy of science.

反実条件文の分析はけっして小やっかいな文法練習などではない。実際、反実条件文解釈の手段を欠いていたら、私たちは、適切な科学哲学をもっているとは言えないであろう。

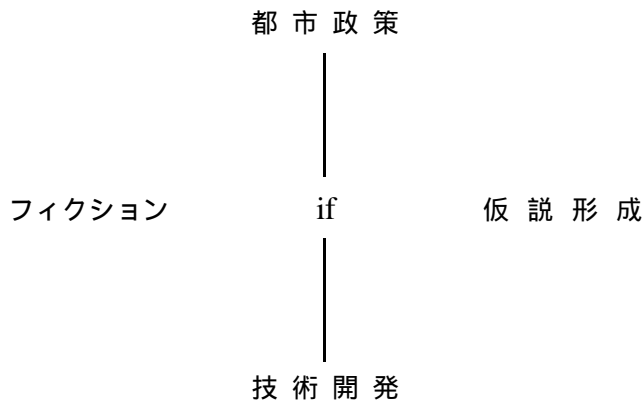
半世紀以上前に書かれたものだが、反実仮想は孤立していないことを、言い換えれば、反実仮想は現実と密接にかかわっていることを、この文章は鋭く指摘していると思われる。Fauconnier (1997:99-130) は、同じ文章を引用して反実条件文の重要性を説き、メンタルスペース論の中で「反実現象」(‘counterfactual phenomena’) を幅広く扱おうとした。彼が注目したのは、グッドマンがあげた例文を含む次のような言語表現である。

- (1) If that piece of butter had been heated to 150 ° F, it would have melted.
- (2) If I had been Reagan, I wouldn't have sold arms to Iran.
- (3) If the tau lepton had existed in the 1GEV range, I would have discovered it.
[disappointed physicist Zichichi]

私たちが意図するのは、反実現象の認知科学的分析を行うことではなく、広い意味での反実思考と現実とのかかわりを、とくに都市における現実とのかかわりを、文化の境界や学問分野の境界を超えて考えることだが、フォコニエの視野の広さから学ぶべきことは学びたいと思う。

「都市とフィクション」の「フィクション」は、したがって、フィクションとは意識されないフィクションを含んでいる。都市政策に携わる者が設計する

都市の未来像も、技術開発者が提案する新製品も、それが現実化されていない間は私たちが考える意味でのフィクションであり、科学者の仮説もほぼ同様である。ひとは、変えようのない過去の事件について‘if’（もしも）と考えることができるように、変えることのできる現実についても‘if’と考えることができる。本シンポジウムのフィクションは、次の図が示すように、躍動的な思考の中心にあって、様々な質的飛躍を可能にしてきた‘if’に直接つながるフィクションである。当然ながら、本報告書中の諸論文も、また、この‘if’につながっている。



シンポジウムは二日にわたって行われ、初日の9月30日には、内外の研究者8名がそれぞれの立場から「都市とフィクション」というテーマにつながる論を展開し、最後に全体討論を行った。ここに収録された論文のうちの最初の8篇は、全体討論の基礎になった各論に論者が手直しを加えたものである。

ハンブルク大学で日本学を学ぶニコル・クリー氏の「前近代日本の都市文化と異界」は恐れの対象としての妖怪を、三上雅子氏の「都市とモダニズム」は憧れの対象としての宝塚を、それぞれ論じている。これに対して、杉井正史

氏の「シェイクスピアとロンドン」は、都市とその外との境界に出現した初期大衆劇場の演劇とレプラ患者との類似性にまず読者の目を向けさせ、権力批判という機能を果たす一方で市民の自由を封じ込める手段として使われた演劇の二面性を強調する。当然ながら、それは、恐れと憧れの意味について、また、クリー論文と三上論文について、再度、読者に考えさせるであろう。

イアン・リチャーズ氏の「The City and the Growth of New Zealand Fiction: Janet Frame's "Miss Gibson and the Lumber Room"」は、創造ということの本質にふれる論文である。イギリス文学の模倣から脱してニュージーランドが独自のフィクションをもつに至る過程で起きたこと、すなわち、氏のいわゆる「cultural baggage」の廃棄、本質部の継承、ニュージーランドをニュージーランドたらしめるものの投入ということを、リチャーズ氏は、ジャネット・フレ임 (Janet Frame) の「Miss Gibson and the Lumber Room」という短編小説を通して語る。氏のことばは、他の論文中の（とくに三上論文中の）関連部とも共鳴して、ハンプルク大学日本学研究室のユーディット・アロカイ氏による「江戸中後期における三都間の歌壇の対立」の、リチャーズ氏自身も予期しなかった導入部になり得ている。

アロカイ論文のタイトルに現れる「三都」は、京、大坂、および江戸である。これらの都市の一般的イメージはフィクションとは意識されないフィクションと言うべきものであろう。アロカイ氏が論じるのは、そのような一般的イメージとは異なる三都が和歌の変革に際してどのような働きをしたかということである。他方、中島廣子氏は、「ジュール・ヴェルヌにおける空想の都市」において、サイエンス・フィクションと、そこに描かれたものの現実化について語り、夢を紡ぎ出す文学の機能を再認識すべきではないかと説く。いずれも、リチャーズ氏に応ずるかのような論説になっている。

シンポジウム初日の最後に報告者したスティーヴン・ドッド氏は、ロンドン

大学 SOAS(東洋アフリカ学院)の長期プロジェクト「都市と文学」(‘The City and Literature’)の企画推進者の一人である。氏は、梶井基次郎による「個人と都市空間との関係」の探求を扱い、「檸檬」における「内面に秘められた自己と外界で起こる事象との境界線」の透過性・曖昧性を論じた。「あいまいな都市 梶井基次郎における自己と他者」というタイトル中の「自己と他者」は‘self and other’の訳語である。この訳語に氏が満足しているわけではないことを知った私たちは、シンポジウム前日の打ち合わせ時に、「自と他」、「自己と外界」などの訳語を氏とともに考えたのだが、氏の最終判断に従い、もとのままにした。本論文集に収録されているドッド論文のタイトルも、このような経過を経て選ばれたものと考えていただきたい。

なお、「都市のフィクションと川 『隅田川』の系譜」の執筆者である田畑はシンポジウム司会者の一人でもあり、当日は、諸報告をつなぐことを、また、欠落部があればそれを補うことを期待されていた。論文もそのような状況を反映している。

シンポジウム二日目の10月1日には、大阪市立大学文学研究科COE研究員に選ばれた若手研究者のうちの5名が第1日と同じ「都市とフィクション」というテーマにつながる報告を行い、スティーヴン・ドッド氏、およびユードイット・アロカイ氏の評を受けた。本論文集に収録された最後の五つの論文は、それを受けてさらに発展した各研究員の思考の成果である。

劉慶氏の「説経の都市芸能化」では元禄日本の都市が、北原博氏の「ゲーテの『ウェルテル』と門」では18世紀ドイツの都市が、出口菜摘氏執筆の「都市における欲望と詩作 T. S. エリオットの初期作品をめぐって」ではイギリスの都市が、鈴木康予氏の「1930年代上海と張天翼『洋涇浜奇侠』」では中国の都市が、竹下幸男氏による「都市はユートピアたりうるか 1950年以後の都市とWilliam Gibson の *Newromancer*」ではアメリカの都市が、ときに非

都市部と対比して取り上げられる。文化圏の違いはあるにしても、論じられる内容は相互に関連していると言ってよい。

シンポジウムを企画し推進していく過程で私たちがますます重く受けとめるようになったのは、「都市とフィクション」というタイトルの意味である。それは、当初、私たちが考えていたよりもはるかに多くのものを包含していた。竹下論文が示すように、「都市とフィクション」は、都市そのものの展開、あるいは、より大きなことばを使うなら、社会の進化にもかかわるテーマである。その社会の進化 (societal evolution) について、Wallace (1994:87) は次のように述べている。

[T]he transition from one stage to another is an addition rather than a substitution. . . .

[社会の] 一段階から次の段階への移行は、置換ではなく付加である。

大局的にはこのとおりかもしれないが、リチャーズ論文が明瞭に示すように、あるものが新しい段階に達したときには、しばしば、付加のみならず、削除が断行されている。本報告書中のいくつかの論文は、引くことによって可能になる付加、あるいは廃棄することによって可能になる創造もあることを示している。

しかし、創造においては廃棄が投入と同じように重要であるということは、等価変換理論を提唱した市川亀久彌 (故人) が繰り返し強調したことである。その市川 (1984:279) が自分の理論をかみ砕いて語ろうとしたときに、「鏡に色、形あらましかば、うつらざらまし。」という兼好の反実仮想文を引用したことは、近ごろ人口知能の分野で市川理論再評価の動きが見られることと併せて、きわめて興味深い。大阪市立大学大学院文文学研究科において都市文化創造のための人文的研究を推進するためには、外国の優れた知見だけではなく、我が国の研究者たちが蓄積した知的財産をも継承して、海外へ発信できるものに発展さ

せることが重要であろう。本報告書は、それを目標にして行われた試みの成果であり、次年度以降のさらなる前進の足がかりになると考える。

参考文献

- Goodman, N. 1947. The Problems of Counterfactual Conditionals. *Journal of Philosophy* 44.
- Fauconnier, G. 1997. *Mappings in Thought and Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ichikawa, K. (市川亀久彌). 1984. 「等価変換創造理論の全貌 精神活動面における発展の論理の法則性」. 馬場謙一・福島章・小川捷之・山中康裕 (編) 『創造性の深層』. 東京: 有斐閣.
- Wallace, W. L. 1994. *A Weberian Theory of Human Society: Structure and Evolution*. New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press.